

「エルサレムへ顔を向けて」
ルカによる福音書 9 章 51－62 節

ルカによる福音書 9 章 51 節には、「イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた」と記されています。ここからルカ福音書の大きな転換点が始まります。主は慣れ親しんだガリラヤを離れ、十字架の待つエルサレムへ向かわれました。「決意を固められた」という言葉は、原文では「顔を固く向けられた」という意味です。拒絶や苦しみ、そして死を見据えながら、主はその道を避けることなく進まれたのです。

旅の途中、主はサマリアを通られました。しかしサマリア人はイエスを受け入れませんでした。当時、ユダヤ人とサマリア人の間には長い対立があり、エルサレムへ向かうイエス一行は拒絶されたのです。十字架の道は、このような小さな拒絶や冷たい視線の積み重ねの中で既に始まっていました。

この拒絶に対し、弟子のヤコブとヨハネは怒り、「天から火を降らせて滅ぼしましょうか」と言いました。彼らは預言者エリヤの物語を思い起こし、神の裁きを求めたのです。しかしそれは十字架の道ではありませんでした。イエスは振り向いて彼らを戒められます。主がエルサレムへ向かわれるのは、人を滅ぼすためではなく、むしろご自分が十字架において神の裁きを引き受けるためだったからです。怒りに燃える弟子たちを、主は見捨てず、振り向いて憐れみのまなざしを向けられました。

その後、主は三人の人と出会われます。主は彼らに、弟子として歩む道を語られます。最初の人に対しては、「人の子には枕する所もない」と言われました。主に従う道は、この世の安定や成功を保証する道ではありません。それでも、主は父なる神と共に歩んでおられました。私たちも、不安や孤独を感じる時がありますが、神の御手の中で歩むことができるのです。

二人目の人は「まず父を葬りに行かせてください」と言いました。しかし主は「死んでいる者たちに自分たちの死者を葬らせなさい」と言われます。これは冷たい言葉ではなく、死は主ご自身が担われる領域であるという宣言です。十字架と復活によって死に勝利された主だからこそ、「死はわたしが引き受けるから、あなたは命を語りなさい」と命じられるのです。

三人目の人には、「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない」と言われました。神の国に従う歩みは、過去やこの世の価値に心を引かれ続ける歩みではありません。主ご自身が十字架を後回しにすることなく、ただ私たちの救いを見つめて歩まれたからです。

しかし私たちは弱く、主に従う決意を持ち続けることができません。実際、弟子たちも最後には主を裏切り、逃げてしまいました。それでも救いは失われませんでした。それは弟子たちの決意によるのではなく、主イエスが十字架の道から顔をそらされなかったからです。主は弱く迷う私たちを救うために、最後までエルサレムへ顔を向け続けてくださいました。

そして今も主は、憐れみのまなざしをもって私たちを見つめ、「わたしに従いなさい」と招いておられます。私たちは自分の強さによってではなく、揺るがない主の愛によって、この招きに応えることができるのです。